

東陽寺あれこれ

平成11年～平成30年の東陽寺の寺報より



内容

公文書による東陽寺	(平成二十三年二十五号)	… 3
東陽寺の有形文化財	(平成二十三年二十六号)	… 4
東陽寺の有形文化財	(平成二十四年二十七号)	… 5
東陽寺の有形文化財	(平成二十四年二十八号)	… 7
塩原太助歌舞伎鑑賞研修会	(平成二十五年二十九号)	… 8
東陽寺展示場の土器・石器・遺跡品	(平成二十五年三十号)	… 11
東陽寺展示場の遺跡品	(平成二十六年三十一号)	… 14
東陽寺展示場の遺跡品	(平成二十六年三十二号)	… 17
東陽寺の過去帳に記載された有名人	(平成二十七年三十三号)	… 19
東陽寺の過去帳に記載された有名人	(平成二十七年三十四号)	… 21
東陽寺の過去帳に記載された有名人	(平成二十八年三十五号)	… 23
東陽寺の過去帳に記載された有名人	(平成二十八年三十六号)	… 24
東陽寺の過去帳に記載された有名人	(平成二十九年三十七号)	… 26
東陽寺復興再建寄付勸募帳	(平成二十九年三十八号)	… 27
東陽寺の過去・現在・将来	(平成三十年三十九号)	… 29

『編集後記』…………… 31

公文書による東陽寺

(平成二十三年二十五号)

東陽寺シリーズ第十八弾として、台東区教育委員会の文化財保護条例に従って取り纏めた「御府内寺社備考 四」の調査資料を今回紹介したいと思います。

「御府内寺社備考」は、平成十五年に江戸四百年を迎え、神社仏閣の由来、並びに台東区の江戸時代の伝統を伝える公文書です。この本は、台東区に江戸時代から位置した寺八十七ヶ寺の記事を収録しています。

その73番目が 東陽寺 です。

御府内備考続編卷之百六 寺院部八十二 曹洞宗

下総国葛飾郡山王山村東昌寺末 浅草八軒寺町

万年山東陽寺 境内拝領地六百五拾坪七合五勺

慶長十六年辛亥八月式四日、八丁掘二而寺地拝領仕。

其後寛永十二乙亥五月式二日、替地拝領仕当地へ引移申候。

○開山勅特賜大峯仏雄禪師南翁玄舜和尚、

寛永元甲子九月十六日寂。

○二世中興開山明巖良察和尚、寛永八辛未年正月九日寂。

○本堂 本尊釈迦如来木像

○桜之井

右は当寺引移不申候以前に有之候地水二而、正保四丁辛年中二井

戸輸入申候。

○稻荷社

右は井戸之脇ニ安置有之故、其節に手向野稻荷与号候。

当寺引移不申候以前に有之候。

○戸田茂睡墓 碑面に雄峰寺殿傑山玄英居士、天和二壬戌年十一月晦

日と記し、碑陰に銘在り左の如し。

憑雲寺なしのもの茂睡

雲操院檜山ていりん

かせのおとこけの雫も天地のたえぬみのりの手向にハして

晴天白日出東山

風払情雲眼界閑

志学纒過三歳夢

一朝笑倒本来顔

以上乙酉書上

○手向野 浅草東陽寺と云寺に有。此寺の近所に戸田茂睡といふ者有。年老腰かかまりて馬に乗る事も自由ならず。弓をひかんと力おとろふるまま身を退き草庵のうちに念仏を申すおのか所作とす。一人の子あり名を伊左衛門と云。父にハ遙に生れ増りて心かしこく器量も勝れけれハ、世の人類ひなきやうにかけもなく誉けれハまして、親の心のうちにハ手の内の真尼珠たるころの如意宝珠とおもひたりしに、天和二年の冬の廿日年十八才にて世を去る。親の歎きたとへていはん方なし。終に浅草東陽寺手向野の墓所に納め傑山玄英居士と号す。辞世の詩あり。

晴天白日出東山 風払情雲眼界閑

志学纒過三歳夢 一朝笑倒本来顔

此詩則石塔に切付て有。石塔の脇に一の石を立て手向野と切付て茂

睡か歌あり。

風の音苔の雫も天地の絶ぬ御法のたむけにハして

○手向野 境内にあり。寛文の頃寺のちかきに戸田茂睡と云歌よみ

住けり。一子伊右衛門天和二年十八歳にして卒す。此手向野に葬

石塔のかたはらに石を立手向野とほりて

風の音苔の雫もあめつちの絶ぬ御法の手向けにハして遙世し高野

山に入りし也

○桜か井境内にあり、たくひなき名水なりしか、廟参の者あやまつて腰の物をおとす。それより鉄気すこしあり。

巳上江戸砂子

○寺伝に日、此辺奥州海道にして刑罪場なり、故にその亡魂に念仏するゆへ手向野といひしとなり、享保の頃茂睡といふ歌人の建し碑ありしか、火災の後ハ跡なくなりぬ。

(江戸志)

○此地を手向野といはんには此寺内のミにハとまるへからず。広き所なるへし。又刑罪場ここに有しといふも疑ふへし。古く鳥越に斬罪場ありし事ハ其所にも載たり。ここにありしとい云ハ他の書に所見なし。

(改撰江戸志)

○手向野の碑ハ火災の時住僧金龍寺境内にあり。是当寺八世の時なり。彼碑の図ハ金龍寺の条に出せり。

(搜索)

○戸田八平衛恭光ハ後茂右衛門と改む。世を連れて茂睡と称し露寒軒と号す。祖父を渡辺久三郎或ハ久左衛門重綱或ハ茂綱と云。従五位下山城守に叙任し慶長の初め大番頭を勤め采地五千石を領し後二条定番となり二千を加増、父を監物忠と云、実は戸田与五右衛門忠勝か二男也。重綱かために養はれ慶長五年上杉景勝征伐として会津へ御出陣の時、父にかはりて組の大番衆五十人をひきいて供奉あり、是十六才の初陣なり。後父と共に伏見の城を守り、いく程もなく駿河大納言忠長卿の家老に転し、別に五千石を領し彼卿の御事ありし後、大関土佐守高増に預けられ、彼領地下野国那須軍の上ノ庄東山の西羽黒と云処に閉居す。後御免を蒙り子孫その家に仕ふと云。恭光ハ忠か六男なり。父か実の苗字を名乗れり。寛永六年五月十九日駿河国府中の城三ノ丸にて生まれいとけなきより父と共に黒羽に居りしか後江戸に至り住めり、此人和歌の道に長し其名世に高し詠する処の歌数多ありてあまれく人口に残れり。宝永三年四月十五日七十八歳にして死す。庵の前に山梨の木一本ありしより梨の本と云あらはす所の書梨の本集紫の本隠家百首鳥の跡あり。又庄九郎物語と云もの此人の作なりとそ。

(浅草名跡誌)

東陽寺の有形文化財

(平成二十三年二十六号)

東陽寺シリーズ第十九弾、足立区の有形文化財に指定されている文化財を、複数回に分けて紹介します。当寺で有形文化財に指定されている文化財は、七つあります。

昭和五九年十一月登録二五号 塩原太助の墓

平成四年一月登録四〇〇四号 戸田茂睡の歌碑

(都内最古の歌碑)

平成四年一月登録四〇〇五号 釈迦三尊像板碑中世

平成二十三年三月登録二二一一〜四号 板碑四点中世

の七つです。

初めに塩原太助の墓についてお話します。

まず、お墓の場所は墓地の入り口、水屋横にある六地藏の前にあります。



塩原太助之墓

右記写真の通りは墓石の竿の正面に家紋に十文字の引き両紋があり、

その下に太助に戒名 塩原寿算居士とあります。その墓石には塩原家の戒名が彫られています。

- 初代 塩原寿算居士 (1816年)文化十三年八月十四日
- 二代目 欄嶺智賢居士 (1839年)天保九年三月十三日
- 三代目 明殿燈月居士 (1849年)嘉永二年八月十五日
- 四代目 徹外義秀居士 (1856年)安政二年九月二十九日
- 五代目 賢厳徳性居士 (1868年)慶応四年六月二十七日

ここで少し、塩原太助の略歴をご紹介します。

塩原太助は群馬県下新田から江戸に出てきました。当初は江戸で何をやっても失敗し、昌平橋で死のうとした時に、神田の山口屋炭問屋に助けられ、そこで二十二年間勤勉に働き成功した人物です。

この成功のきっかけは、今まで誰も見向きもしなかった土間に落ちた粉炭を、太助は山口屋さんからもらい集め、それを貯め、後に独立し店を持った時に、この粉炭を元手に、初めてハカリ売りで粉炭を売るといふ、新しい商売を考え出したことにあります。これが当たり、一代で財をなした人です。落語家三遊亭円朝が人情「塩原太助一代記」愛馬「あお」の別れで当時の人々に感動を与え有名に成りました。

東陽寺と塩原太助の縁は、炭問屋の山口屋(山岡家)の菩提寺が当寺であつたことに起因しています。

山口屋さんのお墓より決して高くしてはいけなないと末代に渡り恩義を感じていました。太助の墓の左角に手代さんの墓も立塔されており守りされています。

合掌

塩原太助の業績

- (一)金比羅講燈籠 香川県丸亀市
金比羅信仰と航路標識を兼ね、天保九年建立
八角型三段五・二十八m 青銅製燈籠
- (二)湯島の無縁坂の石畳改修
でこぼこ坂を石畳に主人山口屋より三十両借りて完成
- (三)天神平の常夜塔 (四)榛名神社の玉垣
- (五)亀戸「天神の石灯籠」 (六)「太助の茶かま」

等

東陽寺の有形文化財 その2 (平成二十四年二十七号)

東陽寺シリーズ第十九弾として、前回に続き足立区の有形文化財に指定されている。

平成四年一月登録4004号戸田茂睡の歌碑(都内最古の歌碑)

についてお話しします。

歌碑の有る場所は、正面玄関の横、モミジの木の根元に在ります。



戸田茂睡の歌碑

この歌碑について、以前寺報で紹介した台東区教育委員会の「御府内寺社備考 四」の調査資料に、詳しく掲載されています。

手向野 浅草東陽寺と云寺に有。此寺の近所に戸田茂睡といふ者有。年老腰かかまりて馬に乗る事も自由ならず。弓をひかんでも力おとろふるまま身を退き草庵のうちに念仏を申すおのか所作とす。一人の

子あり名を伊左衛門と云。父にハ遙に生れ増りて心かしこく器量も勝れけれハ、世の人類ひなきやうにかけもなく誉けれハまして、親の心のうちにハ手の内の真尼珠たるころの如意宝珠とおもひたりしに、天和二年の冬の世日年十八才にて世を去る。親の歎きたとへていはん方なし。終に浅草東陽寺手向野の墓所に納め傑山玄英居士と号す。辞世の詩あり。晴天白日出東山 風払情雲眼界閑

志学 纒過三歳夢 一朝笑倒本来顔

此詩則石塔に切付てあり、石塔の脇に一つの石を立て手向野と切付て茂睡が歌あり。と記述されています。

この「御府内寺社備考」の中に有る戸田茂睡の子、伊左衛門の戒名は「傑山玄英居士」とありますが、残念ながら当寺の過去帳を調査したところ記述はありませんでした。

風の音苔の雫も天地の

手向野 戸田茂睡製

絶ぬ御法の手向にハして

この歌碑の意味は

「歌意」人間は死んでしまえば、日々に忘れられていきます。そして

「ほどなく卒塔婆も苔むし、木の葉ふり埋みて、夕の嵐、夜の月の溝、ことと付与すがなりける。」(兼好法師)となります。私の息子もやがて忘れられてしまうが、永久に絶えることない風の音や苔の雫を仏の手向けとして安らかに眠るに違わない。ここは、旅人が幣(ぬさ)を手向けて道中の安全を祈る神様がまつられている手向野なのだから。

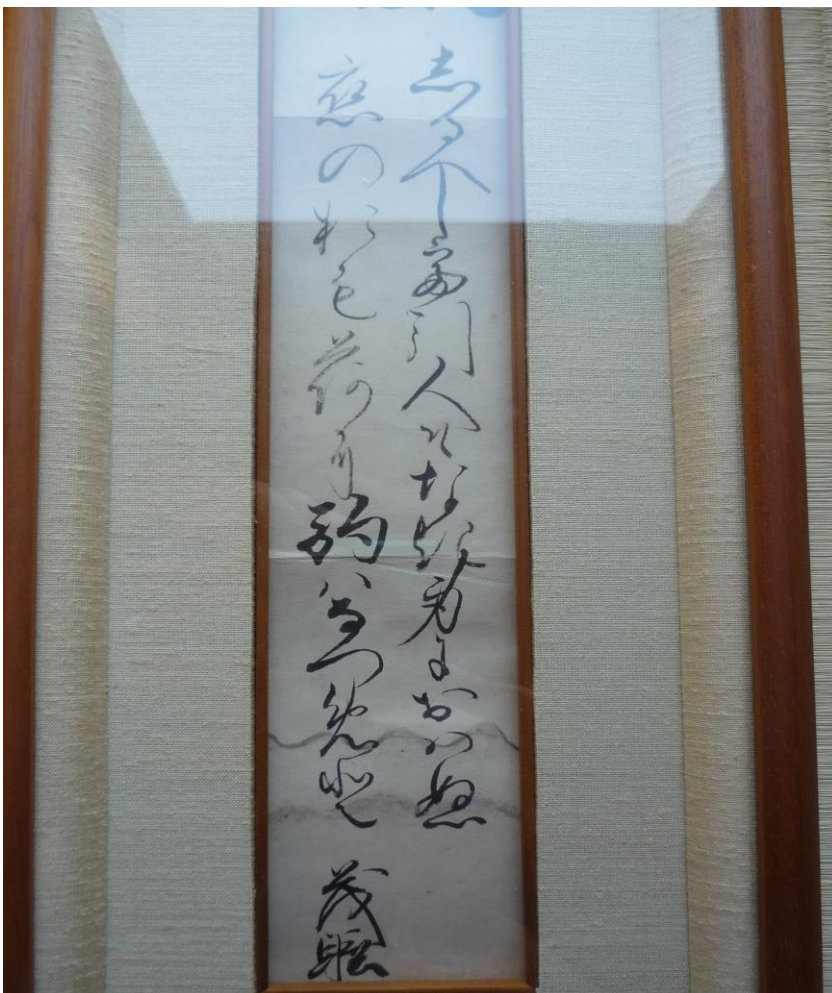
ここで、戸田茂睡恭光の略伝をご紹介します。

寛永六年(一六二九年)駿府城内三の丸にて生れる。父は渡邊監物忠(戸田忠勝の三男)・母は高家大澤氏の娘。六男。父監物は駿河大納言忠長に仕えて六千石賜うが、忠長改易に伴い、那須黒羽大関家にお預けとなる。渡邊茂右衛門(茂睡)も黒羽に暮らす。三十四歳で江戸に出て、四十六歳で本多政長に仕官。三百石。五十二歳で致仕出家、隠遁し戸田茂睡を名乗る。歌人、歌論家。

宝永三年四月没七十八歳。戸田茂睡は、江戸時代を代表する歌人で、当時上方では、近松門左衛門・井原西鶴。江戸では松尾芭蕉とこの茂睡が庶民の人気者でした。最後に、東陽寺が所蔵している茂睡直筆の短冊を紹介して終わらせていただきます。(短冊は客殿内、伊興遺跡展示室の中にあります。)

寄る獣の恋

知るべして、牽人ぞなき身に
おわね恋の重荷に駒はなずめど 茂睡



(2)建武元年八月(一二三三四年)で、鎌倉幕府滅亡の翌年に当たります。



(3)暦応二年(一二三三九年)二月十五日 この時代は鎌倉時代の終りの時期で、足利尊氏が征夷將軍就任した時でもあります。



(4)最後の板碑は、年号不詳です。



塩原太助歌舞伎鑑賞研修会

(平成二十五年二十九号)

東陽寺シリーズ第二十弾として、東陽寺の研修会として、寺の檀家である塩原太助の一代記を国立劇場で実施した時に、参加した御檀家様から頂いた感想を今回ご紹介します。

塩原太助歌舞伎鑑賞研修会アンケート

1、今回の研修会の感想を簡単に一言お願いします。

歌舞伎は初めて。正直、固苦しく、もう少しくわ
わりがらいいかと思っていました。

でも、思ったより、すんぽり、話しの中に入れて、
楽しかったです。

塩原太助さんのこともよくわかりました。

皆さんと一緒に、それとて良かったと思います。

ありがとうございました。

塩原太助歌舞伎鑑賞研修会アンケート

1、今回の研修会の感想を簡単に一言お願いします。

先日は、ありがとうございました。

昨年の大施会寺報(26号)で塩原太助の事について
載っていただけで再度読み、予習したのだ。

初めての歌舞伎鑑賞でも内容を捉えることが出来た。
会場席が末端の方でも、あんなに良く見えるとは...

本場の上手に出来ているんですね。その代わり階段が、

急な坂。やはり、足腰弱い方は、参加が無理なんだろう

と感じました。年齢を重ねる毎に、淡々となり、婆馬アオとの
別れのシーン、20年ぶりに再会する親子のシーン、目が見えなくなると

お爺からアオの事を知って太助が真の正面(主人役)を見て

亡きアオに話しかけるシーン... これぞ中し、ホロリと来た

1つありました。

塩原太助歌舞伎鑑賞研修会アンケート

1、今回の研修会の感想を簡単に一言お願いします。

初めての国立劇場に入場させて頂き有難うと涙を流しました。父から塩原多助のお話しは少しは聞かせてもらっていましたが塩原多助一代記でさまざまな苦難もありながら正直の心で一生懸命に付き自分と見つめてきた人生又は愛馬の昔との別れは涙がこぼれました。爺父母との再会別れの場面の際も自然にとめとなく涙が出て取心しい思いました。人それぞれの色々な事があります。自分の人生に思いをはせました。最後の苦勞がすくわれのどほつたかたものです。招待と頂き色々と久々ばかりと頂き楽しい一日と過ごさせて頂き卒業の一日でした。ほんとは有難うと涙を流しました。社筆にて天礼致します。

塩原太助歌舞伎鑑賞研修会アンケート

1、今回の研修会の感想を簡単に一言お願いします。

この度の研修会には住職様即天妻と長男様。塩原さん皆の心温まる研修会でした。塩原太郎という方が炭屋で成巧に事は知りたりより成巧が今回の歌舞伎を見せていただき、太郎のすばらしい人物像に感動いたしました。涙あり、笑いありで特に愛馬との別れの場面、そして実の両親との再会で父親の太郎を思うがゆえにさびしく追いつく所はとほ涙、涙でした。どんな苦勞でもかたずけられ、実直に持つて生れた性格も良く表現されていけるとも感動いたしました。最後はすべてに幸せとついで笑いの中、幕がふりまじり、事は本当に良かったと思います。三津五郎さんの二役もすばらしかったですね。この様に一日を過ごさせていただき、住職様の塩原さんをおもてくたさる優しいお気持ちがあったから、この事だと思っております。

東陽寺展示場の土器・石器・遺跡品その1

(平成二十五年三十号)

東陽寺シリーズ第二十一弾として、東陽寺の展示場にある遺跡品について数回に亘り写真で紹介いたします。今回は、最も古い縄文時代(縄文後期―紀元前二千年前)縄文晩期―紀元前千年前後)の土器・石器を中心に紹介します。この縄文時代の土器類は、父と私が小学校の時に埼玉県安行に行き集めたものです。(採集場所は、埼玉県川口市東貝新郷貝塚・安行原の畑・峯ノ八幡宮等数箇所です。―東陽寺から自転車で四十分程の所に、貝塚が多数散在しています。)

縄文後期 尖底深鉢土器 (土器の底がとがり、縄目の模様が有る)



縄文後期 注口土器(土瓶形の土器)



図柄が美しい縄文土器





石やり
マッチ棒の長さは5cm



縄文後期
黒曜石（火山岩の一種で、溶岩が急速に冷却して固結してできる。）のやり



鹿の角（縄文人の食生活がわかる）



打製石斧（石で打ち砕いた石器）



どっこいし（密教の法具の「独鈷鉞」に類似している為に、「どっこいし」と呼ばれた。祭祀に利用されたと考えられている。



縄文晩期 磨製石斧（磨きを掛けた石の斧）



縄文晩期 土偶（女性を形どり呪術的祭祀に使用）



石皿（木の実等をすりつぶす皿）

貝の腕輪



耳輪 (縄文人の耳の穴は非常に大きい)



装飾品



東陽寺展示場の遺跡品その2 (平成二十六年三十一号)

今回は、東陽寺周辺から出土した弥生・古墳時代(紀元前三百年前〜紀元後六百年)の土器・遺跡品を中心に紹介します。
寺の現住所である足立区は、文字の通り、『足立つ』と当て字し、大昔は葦の生えた沼地帯でありました。しかし、この弥生・古墳時代の出土品を見ると、高い丘である、寺から歩いて三分の所に有る永川神社を中心に祭礼儀式を重んじる裕福な豪族が住み栄えたことが出土品から読み取れます。特に金の耳輪・メノウの勾玉・青銅器の鏡等めずらしい弥生出土品を見ていきましょう。

弥生土器(赤褐色で、薄手で硬く均斉がとれている土器)

壺 高さ六十センチ



弥生土器 (マッチ棒の長さ5.5cm)



筒埴輪(墓を取り巻く様に周位に建てられ、墓の土盛り説と呪術的殉死
祭礼説がある。)



木の葉の跡がある弥生土器



管玉 (ヒスイの管玉ーこれも貴重なもの)



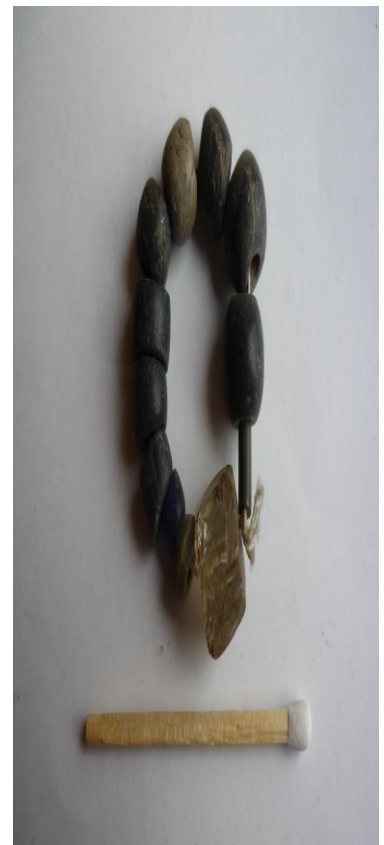
副葬品の数々
勾玉 (メノウの勾玉ー貴重なものです)



銅鏡 一部 (三種の神器の一つ鏡です。)



金冠(金の耳輪)この時代に金の耳輪が有ることはかなり豪族がいたことがわかる。



ガラス玉(カラスは朝鮮から輸入品)・丸玉



祭礼用 模造品(剣・鏡・勾玉) 勾玉は10cmも有るもので珍しい。



紡錘車(糸をつむぐ道具)



鉄鏃 (鉄は当時大変貴重なものです。)

平玉 のばすと1m50cmもある。



土錘 (地引網の錘)



つぎ



東陽寺展示場の遺跡品その3 (平成二十六年三十二号)

今回は、東陽寺周辺から出土した平安時代(紀元後七百年前後)の土器・遺跡品を中心に紹介します。

須恵器(ねずみ色も土器。須恵器は朝鮮半島の製作技術によるもので、ろくろで成形し、のぼり窯で焼く技術を使った。)

須恵器の壺(マッチ棒の長さは5cm)





おろし皿



見事な薄手の作りである須恵器の皿

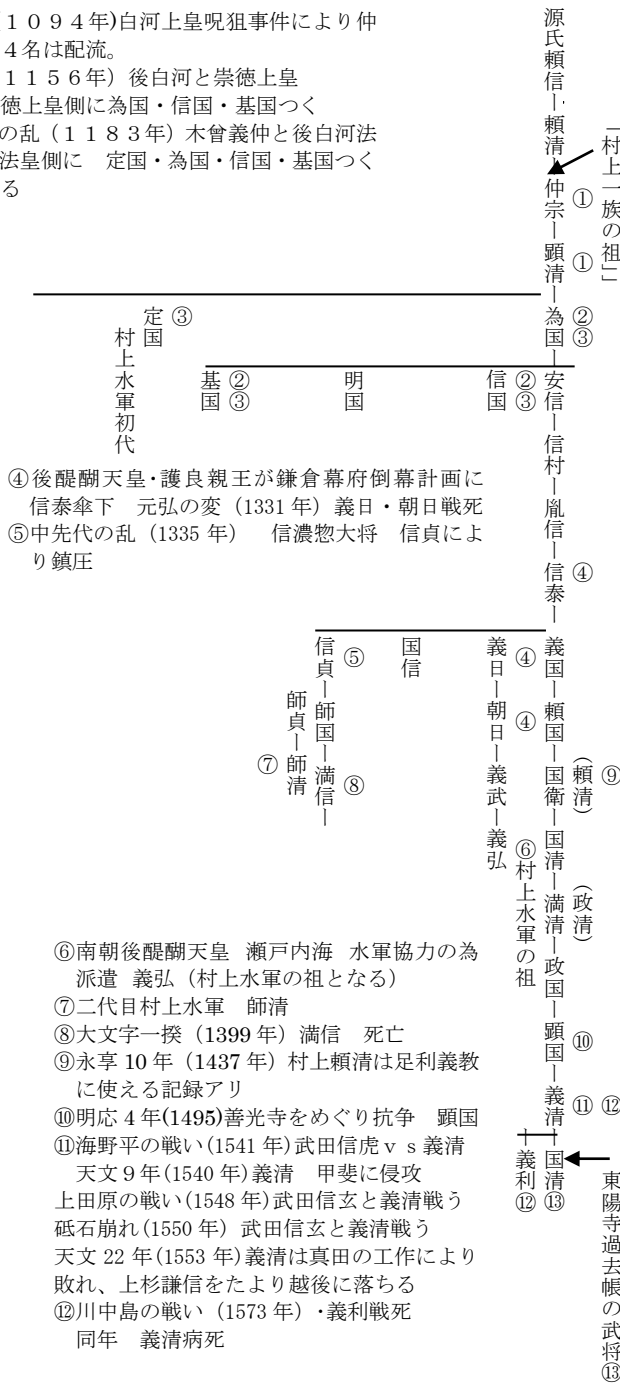


土器の表面にうわ薬が塗られ焼かれた土器（大壺）高さ65cmの大きな壺です。なかなかこのように大きな壺は出土しません。貴重な土器です。

東陽寺の過去帳に記載された有名人 その1 (平成二十七年三十三号)

東陽寺シリーズ第二十二弾として、過去帳に記載された有名人について、数回に亘りご紹介いたします。東陽寺の有名人としては、皆様もご存知の塩原太助が先ず思い浮かびますが、塩原太助については何回か寺報でご紹介しているので、今回は割愛させて頂きます。一番バッターは、前陸奥大守 村上兵部太浦国清 戦国時代の有名武将です。

この村上氏の系図は、平安後期・清和源氏頼義から戦国時代・江戸が始まる前までの天正二十年(一五九二年)の村上国清の死亡までの系図が多数あり、謎の村上一族の系図と言われています。そこで私が調べた範囲で系図を紐解き、私自身これだと思ふ流れを先ずご紹介いたします。



- ④ 後醍醐天皇・護良親王が鎌倉幕府倒幕計画に信泰傘下 元弘の変 (1331年) 義日・朝日戦死
- ⑤ 中先代の乱 (1335年) 信濃惣大将 信貞により鎮圧

- ⑥ 南朝後醍醐天皇 瀬戸内海 水軍協力の為 派遣 義弘 (村上水軍の祖となる)
- ⑦ 二代目村上水軍 師清
- ⑧ 大文字一揆 (1399年) 満信 死亡
- ⑨ 永享 10年 (1437年) 村上頼清は足利義教に使える記録アリ
- ⑩ 明応 4年(1495)善光寺をめぐる抗争 頼国
- ⑪ 海野平の戦い(1541年) 武田信虎 v s 義清
- ⑫ 天文 9年(1540年) 義清 甲斐に侵攻 上田原の戦い(1548年) 武田信玄と義清戦う 砥石崩れ(1550年) 武田信玄と義清戦う
- ⑬ 天文 22年(1553年) 義清は真田の工作により 敗れ、上杉謙信をたより越後に落ちる
- ⑭ 川中島の戦い (1573年) 義利戦死 同年 義清病死

系図の番号は、関連する歴史上の出来事と対応している。

系図には多数諸説があり、住職が調べた中から最も有力な系図を採用した。

村上一族は右の家系図の通り、平安時代後期に源氏より起こり、仲宗①の時に村上上の姓を名乗りだしました。

- ① 寛治 8年 (1094年) 白河上皇呪詛事件により仲宗・頼清ら 4名は配流。
- ② 保元の乱 (1156年) 後白河と崇徳上皇の対立：崇徳上皇側に為国・信国・基国つく
- ③ 治承・寿永の乱 (1183年) 木曾義仲と後白河法皇の戦い：法皇側に 定国・為国・信国・基国つく 基国戦死する

その後、仲宗①の孫為国②・③は、信濃・丹波の国を拠点に陸の村上一族として、仲宗の孫定国③は、瀬戸内海を中心とした海の村上一族として、鳥羽・後白河院政時代には、保元の乱(一一五六年)等で陸と海で活躍しました。

鎌倉幕府倒幕の時は、後醍醐天皇と係って、信泰④・義日⑤・信貞⑥らが活躍しています。さらに戦国時代になり、義清⑦が、川中島の戦い(武田信玄と上杉謙信の戦い)―一五五三年から一五六四年、五回に亘り戦う)に上杉軍の武将として参戦しています。

この義清の子が東陽寺過去帳に載っている国清⑧です。

国清は、天文十五年(一五四六年)に生まれ、天文二十二年(一五五三年)父義清⑧と共に武田信玄に追われて越後の上杉謙信を頼り猶子となり、謙信の養女を娶り、山浦上杉家を継ぎ山浦国清と名乗りました。その後謙信に仕え、川中島の戦いや越中の戦いなど転戦しました。謙信死後は上杉景勝に仕え御館の乱の功績により、景勝から一字を与えられ山浦景国と名乗ることを許されました。

天正三年(一五七五年)の「上杉軍役帳」には景勝の次で家中第二位250人と記録されています。

天正十年(一五八二年)の本能寺の変には、海津城主となり父の旧領を回復しました。

天正十八年(一五九〇年)豊臣秀吉の小田原攻めでは上杉軍の先鋒を務め活躍しています。

慶長三年(一五九八年)景勝の会津移封に従って塩之森城代となったと記録されています。

(しかし、2代藩主上杉定勝の時『別の者をもって山浦家を再興した』とあり国清は既に死亡断絶していると思われる。)その後の消息は不明です。国清の子供は、幸清と高国の二人とされています。

国清後の系図を調べると

1591年生まれ、1636年没

(景国・国清) 信濃の浪人におちぶれる

⑬ 国清―幸清―義豊―義長―義教―泰国―義処―義頼―義暁―義信

―高国―高清―高任―高景―高照―高重―高虎―高近―高利―高堅―高尚―源吾―要人

(高国:水戸藩水戸頼房に仕え三百石) (高利:大目付け)

1571年生まれ、1659年没

さて、ここで東陽寺の過去帳に載っている村上氏を示すと

天正二十年(一五九二年)村上院殿羽林决山源勝大居士(村上兵部太浦国清)⑬

寺より 戒名に 院殿 号 を送っている。

元禄十三年(一七〇〇年)雄勝院决山源良居士(右京子)

これは、寺の始まりに当り、寺が開基として

正徳六年(一七一六年)龍陽院傑巖源英居士(右京山田八左衛門伯父)

絶大な寄付を受けた施主に特別に送った証拠です。

享保八年(一七二三)浄心院源了宗鑑居士(源公右衛門)

宝暦三年(一七五三年)莊巖院殿良感宗淳居士(織部)

宝暦十三年(一七六三年)廣徳院殿巖智芳居士(舜山)

嘉永二年(一八四九年) 泰心院殿寛岳道隣居士(藤五良)

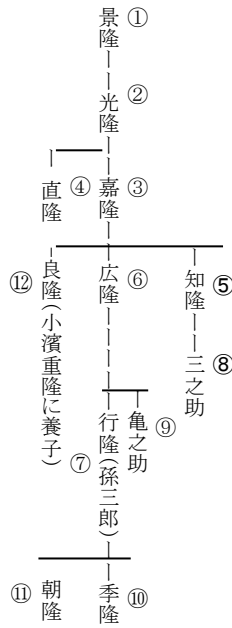
以上が国清の紹介です。村上一族にはいろいろ謎めいた事が数多くありますが皆さんも調べてみてはどうですか。

合掌

東陽寺の過去帳に記載された有名人 その2 (平成二十七年三十四号)

東陽寺シリーズ第二十二弾として、前回に続き過去帳に記載された有名人として、戦国武将として有名な志摩国の小濱一族についてご紹介いたします。

小濱家が東陽寺の檀家になったのは、寺が京橋八丁掘寺町あることと小濱家の江戸屋敷が同じ場所にあったことが、御江戸大絵図天保十四年(1843年)の地図で確認できます。では、小濱家の家系図を初めにご紹介いたします。



次に東陽寺の過去帳にある小濱氏の戒名を記載すると以下の通りです。(一部省略)

- 慶長二年(1597年) 心翁淨見居士(景隆①)享年58歳
- 寛永十九年(1642年) 川福院殿白翁淨龍居士(知隆⑤)享年21歳
- 寛文四年(1664年) 春岩院天峯性瑞居士(嘉隆③)享年65歳
- 宝永二年(1705年) 月峯院殿物外道超居士(広隆⑥・民部)享年54歳
- 元文五年(1740年) 真正院殿見巖義徹居士(佐右衛門)
- 寛延三年(1750年) 現成院殿全巖良機居士(小濱氏)
- 宝暦七年(1757年) 覚照院殿淨智道圓居士(十郎左衛門)
- 明和元年(1764年) 成功院殿英山道雄大居士伊勢守(従五位下前勢州刺史)
- 天明二年(1782年) 活志院殿珠領蒼龍居士(銀藏)
- 享和元年(1801年) 真了院殿謙外義中居士(英五郎)
- 文政三年(1820年) 保春院殿文紹惠隆居士(十良左衛門)
- 天保二年(1831年) 廓然院殿體翁儀賢居士(三郎四良)
- 天保九年(1838年) 壽徳院殿欄山登秀居士(晴翁)
- 天保十二年(1841年) 實性院殿堪相理然居士(彦七郎)
- 嘉永二年(1849年) 清光院弧峰秋天居士(民次良)
- 慶応三年(1867年) 楽心院殿如童古仙居士(彈巫)

- 寛永元年(1624年) 美應二年(1652年)
- 貞享五年(1688年) 享保十二年(1727年)
- 寛保三年(1743年) 宝暦三年(1753年)
- 宝暦七年(1757年) 安永七年(1778年)
- 寛政九年(1797年) 文化元年(1804年)
- 文政十二年(1829年) 天保六年(1835年)
- 天保十二年(1841年) 嘉永二年(1849年)
- 安政七年(1860年)

寺からは院殿号を授与している。

- 鐵洲良心居士(光隆②)
- 梅林幻花童子(半左衛門・三之助⑧)知隆⑤の子7歳
- 性光院全無正提居士(佑右衛門・直隆④)享年70歳
- 寛量院殿智大居士(志摩守殿・久隆⑫)
- 法源院殿性海義光居士(十郎左衛門子)
- 実相院殿一了無三居士(孫三郎・行隆⑦)
- 堰溪院殿悟山徳水居士(八重八)
- 祥岳院殿常安義清居士(源三郎)
- 功山院殿全用道機居士
- 善成院殿徳雲智見居士(鉄三郎)
- 靈岸院殿隋流自傳居士(徳治良殿)
- 儀運院殿徳峰龍禪居士(満次郎)
- 善格院殿正心原理居士(長五郎)
- 道樹院殿梅岩義芳居士(民次良)
- 仁壽院殿慶應雲山居士(半左門父)

景隆① 小濱衆は現在の三重県鳥羽市小浜に本拠地を置き、伊勢湾に勢力を持った海賊の頭目で、伊勢国司の北畠具教に仕えた。

永禄2年(1559年)冬の戦いで織田信長の援助を受けた九鬼嘉隆に破れ、伊勢湾を追われた。

その後元亀二年(1571年)に武田信玄に仕えた。その当時安宅一艇、小舟十五艇の舟大将となる。

元亀四年(1573年)武田勝頼に三千貫の知行を与えられ、海賊商人であると同時に武田氏の分国内の陸での商業免許である『諸役御免許』を得て活動している。

天正十年(1582年)に武田氏が滅亡すると、徳川家康の舟大将となる。

慶長二年(1597年)死亡 享年58歳。

光隆② 父(景隆①)同様に水軍衆を率いて関が原の戦いに東軍の徳川氏に仕え、慶長十九年(1614年)大阪冬の陣では、千五百艘で豊臣水軍を打ち破っている。

元和六年(1620年)大阪舟大将に任じられている。

嘉隆③ 父光隆②の長子で寛永十七年(1640年)舟手頭を引継ぎ、寛永十九年(1642年)大阪舟手頭(継ぎ馬廻衆)となる。旗本として五千石を領した。

直隆④ 父光隆②の次男で、慶長十四年(1609年)に藤堂高虎に仕え舟奉行となる。

慶長十九年(1614年)大阪の陣では水軍を率いた。正保三年(1648年)に軍船『伊勢丸』の建造の指揮をとった。

知隆⑤ 父(嘉隆③)の長子であるが、寛永十九年(1642年)二十一才の若さで死亡。

美應二年(1652年)には、子供の三之助⑧も七歳で亡くなる。

広隆⑥ 父(嘉隆③)の次男であるが、長子が亡くなり、父が亡くなると家督(五千石)を引継ぎ寄合に列している。

貞享二年(1685年)大阪舟手頭となる。

行隆⑦ 父(広隆⑥)の次男・兄に亀之助⑨・子供に季隆⑩・朝隆⑪とある。

宝永二年(1705年)父の広隆⑥が没し家督を継ぎ、同年摂津国六千石に移される。

享保九年(1724年)大阪舟手頭となる。享保十五年(1730年)家督を子供の季隆⑩に譲る。

久隆⑫ 寄合 京都奉行となる。

景隆①から行隆⑦・二之助⑧までの系図と東陽寺の過去帳の戒名等確認できたが、

系図の季隆⑩・朝隆⑪以降の小濱一族の過去帳との照合はできなかった。

また、調査の段階で 広隆⑥・行隆⑪の墓所は、東京都文京区駒込の吉祥寺にあるという。

東陽寺の過去帳には、明治二十五年(1892年)の小濱ソノ(真徳院殿妙楽如月大姉)が最後に途絶えている。前回紹介した、村上水軍といい、今回の小濱水軍と東陽寺には水軍を率いる戦国武将に縁があったみたいだ。

東陽寺の過去帳に記載された有名人その3（平成二十八年三十五号）

東陽寺シリーズ、前回に続き過去帳に記載された有名人として、江戸時代の大名として有名な遠州掛川藩の井伊兵部少輔家についてご紹介します。

井伊兵部少輔家初代の直勝②は、慶長七年（一六〇二年）に父・直政①跡を継ぎ近江佐和山藩主（十八万石）となった。その後佐和山藩は廃藩し、新たに彦根城を作り彦根藩（三万石）が置かれた。

父・直政①は、徳川家康が関東移封した天正十八年（一五九〇年）

から慶長五年（一六〇〇年）の関が原の戦いに徳川軍を支え活躍した武将。徳川四天王の一人である。

近江彦根藩（三万石）の大大名の藩主。

その子孫は江戸時代二六四年間を通じ、井伊直弼⑨など五名の大老を輩出。

永禄四年（一五六一年）生まれ。慶長七年（一六〇二年）没

享年四十一歳。

井伊家初代の直勝②は病弱の為、大阪の役においても出陣できず、弟の直孝⑧が出陣し活躍した。このため弟の直孝⑧が彦根藩主となり、直勝②は元和元年（一六一五年）上野安中藩主

（三万石）に分知された。

寛永九年（一六三二年）には、家督を直好③に譲り隠居した。

寛文二年（一六六二年）遠州掛川城で直勝②は病死、享年七十二歳

直好③は正保二年（一六四五年）三河西尾藩に移封される。

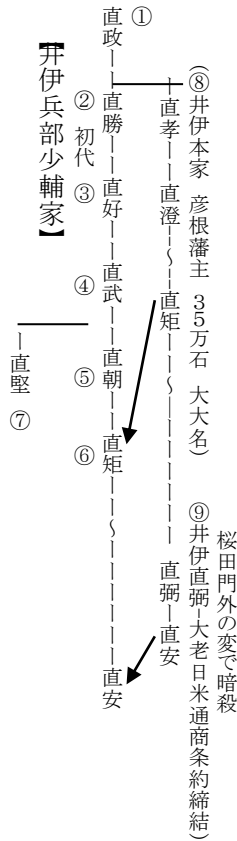
万治二年（一六五九年）には、さらに遠江掛川藩（三万五千石）に移封された。

直好③は寛文十二年（一六七二年）に死去、享年五十五歳。

その後長男直武④が家督を継ぐが、人格に問題あり藩政を悪化させたと言われている。

元禄七年（一六九四年）長男・直朝⑤に家督を譲り隠居。
元禄十年（一六九七年）直武④は死去、享年四十八歳。

直朝⑤も暗愚な人物で、宝永四年（一七〇五年）病気を理由に参勤交代の延期を申し出ているが、間もなく発狂したため、改易となる。しかし、祖先の井伊直政①の功臣であることより、所領を二万石にへらされて家格を下げられて、本家の井伊直矩⑥を養嗣子に迎え家督を継ぐことを許された。
正徳五年（一七二五年）直朝⑤は死去、享年三五歳。



では、ここで東陽寺の過去帳に載っている武将は次の三人です。

寛文十二年（一六七二年）

大勝院殿日頼春果大居士（井伊直好③）

天和元年（一六八一年）

空山幻法童子 次男万之丞 伊右衛門死亡（直堅⑦）

宝永四年（一七〇五年）

井伊万千代殿 戒名の記載なし（直朝⑤）

井伊兵部少輔家初代の直勝②は、遠州掛川城（現在の静岡県掛川市）で病死した為、菩提寺は現在の静岡県袋井市にある可睡斎に墓所がある。

（注釈 可睡斎——平成二十年度、鶴見総持寺・西伊豆 檀参研修会で参詣した場所です。当時は可睡斎と当寺が、こんな関係にあるとは知らず、今ここに過去帳を通じて不思議な縁を感じます。）

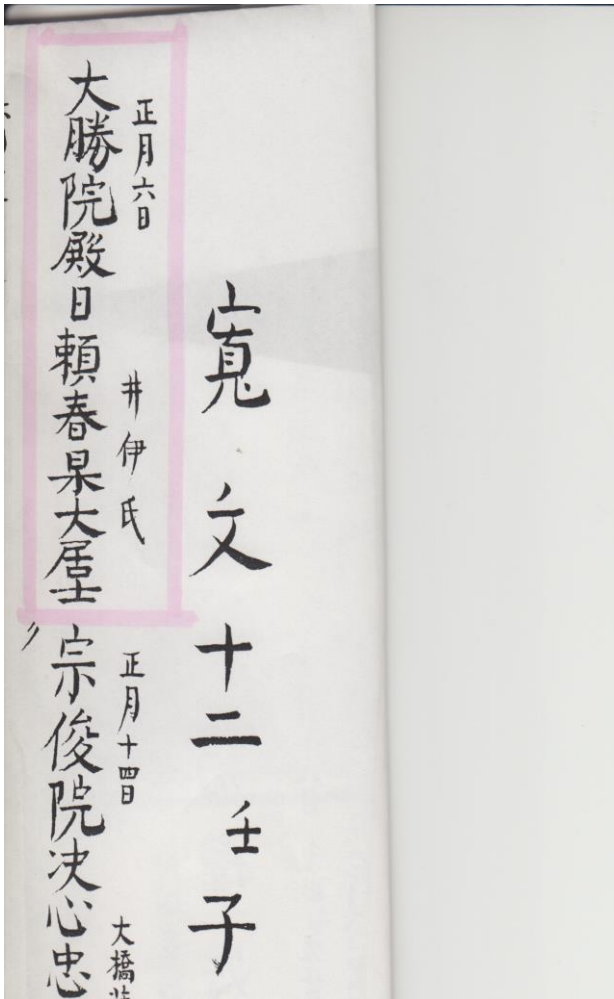
また遠州掛川藩の初代藩主の井伊直好③も同じく墓所は可睡齋である。では何故、東陽寺の過去帳に直好③の戒名があり可睡齋にも同じ戒名が記載されているのか自分なりに考え、想像するに井伊家の江戸屋敷が東陽寺のある浅草寺町の近くにあることが確認されている。そこで井伊直好③が亡くなったのが江戸でありかつ不慮の死であり、東陽寺が急遽葬儀を行い、戒名をつけたのかも知れない。その後、国元の静岡城に戻り、井伊家の菩提寺可睡齋に納骨されたと考えればつじつまが合う。

また、もう一つの不思議なことは、直朝⑤の死亡年代です。

東陽寺の過去帳からは、宝永四年（一七〇五年）に死亡とあるが、インターネット調査では正徳五年（一七一五年）享年三六歳とある。この違いは先に記述した、宝永四年（一七〇五年）病気を理由に参勤交代の延期を申し出ているが、間もなく発狂したとの記載事実と想像するに、実は直朝⑤がこの年に死亡したのではないかとの疑問が湧く。

（この説は、あくまでも住職の想像です。）

「東陽寺過去帳の記載 実物コピー」



東陽寺の過去帳に記載された有名人その4（平成二十八年三十六号）

東陽寺シリーズ第二十二弾として、前回に続き過去帳に記載された有名人として、江戸時代の商人を超えた日本の偉人として有名な河村瑞賢の一族についてご紹介します。

初めに河村瑞賢の略歴を紹介します。

瑞賢は元和三年（一六一七年）三重県度会郡南伊勢町の貧農に生まれた。十三歳の時に江戸に出て、土木工事の人夫頭を行いながら徐々に資産を増やし、材木屋を営むようになった。明暦三年（一六五七年）、明暦の大火事の際に木曾福島の木材を買占め、土木・建築を請負い莫大の利益を得た。寛文年間に老中で相模小田原藩稲葉正則と接触し、幕府の公共事業に係り豪商にのし上がった。

寛文十一年（一六七一年）それまで幕府代官所などが管轄する年貢米を奥州から江戸へ輸送する際は、荒浜から銚子、そこから川船に乗り換えて利根川を上り、更に小船に乗り換え溝を通って江戸湾に出ていた従来の回路を止め、利根川河口から房総半島の小湊經由、相模三崎・伊豆下田へ入り、西南風を待つて直接江戸湾に入るという新しい航路、東廻り航路を開いた。さらに翌年には、西廻り航路で敦賀から陸地經由琵琶湖・陸地を名古屋と回った従来の航路を、出羽酒井から日本海沿岸廻り瀬戸内海・紀伊沖・遠州灘を經由で江戸に入る、新しい西廻り航路を開いた。この航路により輸送に要する時間と費用を大幅に削減した。

さらに途中に寄港地を決め、入港税免除や水案内船の設置を行い海運の発展に貢献した。

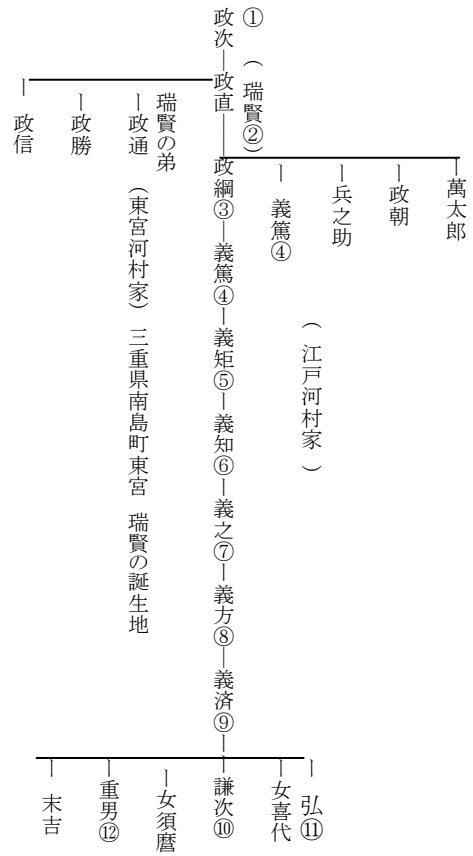
貞享元年（一六八四年）には、淀川河口の治水工事を任せられ貢献した。

新井白石とも交友があった。

晩年は元禄十年（一六九七年）将軍綱吉より若年寄を指揮する旗本に指名された。

元禄十二年（一六九九年）八三歳で死去。

『河村瑞賢系図』



ここで、東陽寺過去帳に載っている河村家の人々を列挙すると

- 寛永八年(一六三一年)紅山林霜居士(弥平)
- 慶安三年(一六五〇年)得雄玄了居士(平太夫父) 政次①
- 延宝七年(一六七九年)仁屋永寛居士(瑞賢老子)
- 元禄十二年(一六九九年)英正院傳壽瑞賢居士(新五兵衛父・平太夫) 瑞賢②
- 享保六年(一七二一年)泰岳院節心良雄居士(弥兵衛) 通頭
- 享保十六年(一七三一年)真光院寛義性居士(新五兵衛) 政綱③
- 宝暦七年(一七五七年)光月院桂巖良瑞居士(吉之丞・養父) 義矩⑤
- 安永十年(一七八一年)光胖院瑞賢周範居士(吉之丞・平太夫) 義篤④
- 文政十三年(一八三〇年)常閑院仁瓊儀徹居士(庄助) 義知⑥
- 天保十三年(一八四二年)緑樹院夏山清涼居士(主税) 義方⑦
- 嘉永七年(一八五四年)直指院天山道悟居士(弘助) 義之⑧
- 明治二年(一八八八年)法雲院實翁義山居士(普五兵衛) 義方⑧
- 大正十四年(一九二五年)真覺院義翁賢濟居士(義濟⑨)
- 昭和五三年(一九七八年)法如院浄謙承次居士(謙次⑩)
- 平成十四年(二〇〇二年)貞心慈照大姉 貞子

貞子が現在過去帳に河村家として最後の記載者
以上

主だった河村家十五名の方々戒名です。
尚、東陽寺過去帳に載っている河村家は五一名で、その内、瑞賢



平成四年二月十五日 河村瑞賢追悼碑 建立

本人②と通頭(弥兵衛)の二人は、神奈川県鎌倉にある建長寺に埋葬され眠っている。
また、義済の長男弘⑩と三男重男⑪の二人は雑司ヶ丘水蓮に埋葬された。
平成四年 前住職(私の母)が、河村瑞賢を偲び瑞賢追悼碑の建立をした。
現在東陽寺にある河村家のお墓は、昭和の初めに建立されたもので、江戸時代のお墓は関東大震災で浅草の時代に破棄され、残念ながら残っていません。

東陽寺の過去帳に記載された有名人その5（平成二十九年三十七号）

東陽寺シリーズ第二十二弾として、前回に続き過去帳に記載された有名人として小野半左衛門についてご紹介します。
今回紹介しようとする小野氏は、現在水屋の横にお墓の竿石があり、そこに小野半左衛門の戒名が刻まれ残っています。



私が特に興味を持った理由は、関東大震災で廃墟した浅草の地から苦労して竿石を持ってきただけの理由がある有名人に違いないと考えたからです。また、戒名に院殿号を付けているとなると、当時かなりのお金を寺にもたらした人物だと思います。（院殿号をもらえるのは、當時寺を建立するに値する寄付があった者のみに授与されるためです。）早速小野一族の系図を調査しました。
初めに東陽寺の過去帳に載っている小野一族は、

寛政9年（1797年） 荷香院殿浄室千葉大姉（小野半左衛門奥方）
寛政12年（1800年） 雄心院殿全節英山居士（四郎五郎）
寛政12年（1800年） 戒月智雲信女（半左衛門妾）
享和2年（1802年） 玄功院殿智徹道運居士（半左衛門）
文化6年（1809年） 貞性院殿湛操壽海大姉（六三郎祖母）
天保2年（1831年） 宏麟孩亡（四良五良子）
天保3年（1832年） 蓮室涼薫大姉（四良五良娘）
弘化2年（1845年） 慧観禅孩女（四良五郎孫）
安政2年（1855年） 緑樹院柳裁恵明大姉（録三郎隠居）
明治8年（1875年） 無相浄心信士（栄次郎）
大正9年（1920年） 順徳院殿貞覚鏡參大姉（豊太郎妻）

インターネットで小野半左衛門を検索した結果三件見つけた。

一つは、秋田県公文書館 郷土資料 系図 小野氏』

小野半左衛門家は秋田藩佐竹家（大名）の家臣であり、宝暦十二年（1762年）生まれ、寛政元年（1789年）に大番組に入り、同六年に家禄を継承したとある。寛政九年（1797年）女の子を授かると公文書にあるが、半左衛門奥方は同年寛政九年死んでいる。また、公文書の署名に半左衛門 文化二年（1805年）とあるが、半左衛門の死亡享和二年（1802年）であるので当寺に記載されたれ半左衛門とは、別人である。

もう一件は、国立国会図書館 藤堂高虎（戦国時代から江戸時代初期にかけての武将・大名22万石・浅井家・豊臣家・徳川家と七度主君を変えた。）家臣辞典 『小野半左衛門』 別名 半入とある。藤堂高虎の家臣として小野半左衛門がいたが、藤堂高虎の生きていた時代が弘治二年（1556年）生まれ・寛永七年（1630年）没とある。半左衛門の死亡享和2年（1802年）と時代が違っているので別人である。

最後の一つは、彦根城博物館 侍中由緒帳七巻 彦根藩藩主 井伊家の藩士 『小野半左衛門』である。

前回東陽寺の過去帳に井伊家（井伊直好）を紹介したがその家臣に小野半左

衛門がいたのには驚く。詳しく調べると

初代半左衛門は、井伊直政息男 直孝に使え大阪冬夏両陣に参戦。慶長年中(1596年〜1615年)江戸屋敷にいた。

二代目半左衛門は、正保元年(1644年)新知百五十石拝領。

三代目吉武病死。四代目政名、享保三年(1718年)継ぐ。

五代目喜十郎、四代目病死により宝暦十一年(1761年)跡継ぐ。

六代目長次郎、五代目病死により明和八年(1771年)継ぐ。

七代目団蔵(正員)、六代目病死により文化五年(1808年)継ぐ。

お寺の過去帳では、半左衛門の死亡は享和二年(1802年)であるので生きている時代は一致するが、死亡の年が数年違います。

井伊氏の関係と言い、寺に記載されている小野半左衛門は、今回探している半左衛門である可能性は高いと思いました。

しかし、今回インターネットでの調査は、是が限界で、ハッキリ結論を出すに至りませんが、小野家系図をいろいろ調べ、江戸の歴史を少し垣間見た気がしました。

さて、インターネットの調査から5年経ち、今年ふとしたことから近世における東陽寺の檀家ということ、寛政重修諸家譜『江戸時代の大名・旗本などの幕臣を記述した本の中に』小野文左衛門貞利 駿河国井川山村木の事を統括し、支配勘定となる。宝暦8年(1758年)66歳で死去。法名寿水。浅草の東陽寺に葬るとの記述有り。貞利の次男(言貞)が家督を継ぎ、言貞の長子が貞雄と言い、『霽土録』によれば、貞雄が屋敷を本所御蔵南門前にかまえ小野四郎五郎と呼ばれていた。禄高150俵、旗本に列し、書院番として、將軍家直属警護の5番方に属するとある。このことで、先にインターネットで調査した秋田県公文書・藤堂高虎(四国今治市)・滋賀県彦根藩主井伊家の3つは全て違ったことが判った。

小野文左衛門貞利が駿河国井川とあるから、現在の静岡県安部郡井川村と、はつきりしている為です。

今後時間があれば、寛政重修諸家譜の現物を調べてさらなる小野家系図を辿って見たいものだと思います。

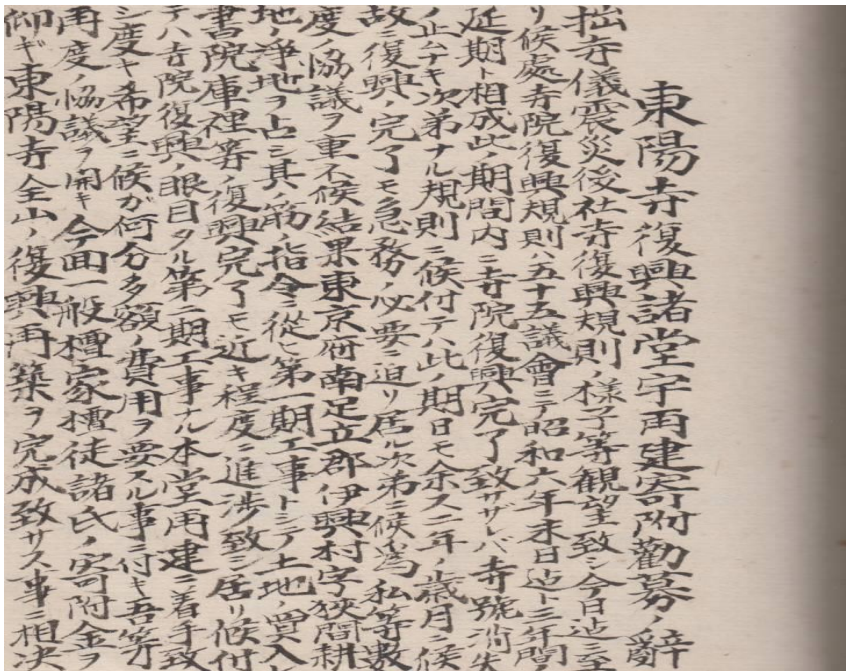
東陽寺の有名人の調査は時間がかかりますが、歴史の重みとロマンに浸ることが出来、楽しい時間がいつの間にか過ぎていきます。

合掌

東陽寺復興再建寄付勸募帳 (平成二十九年三十八号)

東陽寺シリーズ第二十三弾として、東陽寺復興再建寄付勸募帳を紹介いたします。実際の寄付勸募帳をイメージスキャナーしたものが左記の通りです。

これによると、寺院復興を五十五議会にて昭和六年末に完成することが決議され、第一期工事として土地取得・庫裏書院再興で、第二期工事として、本堂再建に一般檀家様に寄付を願ったとあります。



当時の檀家総代は左記の通り木下様・長野様・中村様三名で、檀家様からの集めるべき予算総額は、二万五千円と記載されています。

シ任リ候何卒御佛祖、鴻恩ニ報ヒ且ツハ御祖先ノ佛果菩提、爲御檀家各家ノ靈屋再建ト御了察下サレテ奮ツテ淨財ヲ喜捨シ一日モ早ク再建完了ラ羽異賛セシム事ヲ希望致シ奉候
但シ寄附金六向フニケ年半即チ昭和六年秋彼岸迄ニテ皆納ト御承知被下度候

昭和四年二月十九日 右寺住職 西垣隆満
檀徒總代 木下藤二郎
全 長野文造
全 中村つね

檀家各位 殿
勤募豫算總金額
金貳万五千圓也

その勸募総額の内、総代様の寄付志納は、二千円と記されています。

金貳千圓也 木下藤二郎殿

金貳千圓也 長野文造殿
金貳千圓也 中村つね殿

その他一般檀家様の寄付志納は、

- 金壹千五百圓 三枝林三郎様
 - 金壹千貳百圓 三枝彌四郎様
 - 金壹千圓 服井一郎様 山岡家様 鈴木米藏様 吉永才助様
 - 金八百圓 内山清七様
 - 金五百圓 山本信二郎様 渡辺良之助様 三枝常藏様
 - 多胡太助様 白井むる様 鶴飼巳之助様
 - 金参百圓 登坂新平様 寺島まさ様 並木新助様
 - 金貳百圓 山下榮吉様 福岡公次様
 - 金百五拾圓 栗俣根展様
 - 金百圓 中村可一様 清水由次郎様 桜井武夫様 小西豊次様
 - 杉浦金次郎様 杉浦三吉様 宮野一彦様 西宮九十郎様
 - 清野末松様 服井正之助様 飯田榮次郎様 飯田庄藏様
 - 石屋直久様 早川さわ様 横井菊次郎様 飯塚七五三吉様
 - 西川昇司様 河村将曹様 杉島熊藏様 高田作次郎様
 - 今井榮太郎様 勝矢安次郎様 関谷静様 粕谷信一様
 - 岡村長様 小池恒吉様 伊藤弘光様 御園鐵二郎様
 - 入澤と志様 藤原権太郎様以上 五十二名の寄進者
- 総額 貳萬九百五拾圓 であり、当初の寄付予定額を達成された。
この事は大きな驚きと仏を思う信仰心の強さを深く感じます。
当時は、関東大震災直後、自分の生活もままならない中、寺再建に多くの御檀家様が力を合わせやり遂げた結果です。私は、ただただ頭が下がる思いです。
(蛇足 現在東陽寺の本堂を今すぐと同じ様に新築すると凡そ二億円以上は掛かると推定されます。実に当時の一万円は一億円相当に匹敵する価値があったこととなります。)

平成			時代		
母 宏雲妙穎禪尼			私 梅観幸朋		長男 梅園朋一
現在 90才(在住職10年間)			現在 66才(在住職20年間)		現在 37才
高度成長	バブル崩壊		低成長	テロ リーマンショック	東日本震災 原子力発電事故
檀家数拡大			寺 充 実		
平1 庫裏整備	平2 釈迦堂 建立	平3 如意輪観音 十六羅漢	平1 1 駐車場 拡大	平2 1 客殿 再構築	平2 2 本堂 改修
河村瑞賢碑・戸田茂睡碑 坐禅会			墓地・釈迦堂整備・住職の墓統合 歌舞伎研修会充実		
檀信徒数変化 約 二百七十名			約 三百名		
平成元年	平成9年	平成11年	平成23年	平成25年	新ビジョン
長野哲三	長野哲三	長野靖	長野靖	藤田光春	
長野靖	長野靖	藤田光春	藤田光春	黒川泰芳	
	藤田光春		黒川泰芳	中村彰	
			黒川泰芳	中村彰	
檀家総代の記録が無い為一部不明の個所あり。					

東陽寺シリーズ第二十四弾として、東陽寺の過去・現在・将来の主な出来事・檀家数・総代様等についてご紹介します。上記の大正時代・昭和時代・平成時代の流れを見て頂き時代の変化とその時代の住職の働きが一覧され良くわかります。兎に角、大正十二年関東大震災で浅草の地は、焼け野原で東陽寺はすべてを失った状況で、昭和三年に足立区のこの場所に移転を遂げました。そして、客殿をまず建立し、そこから東陽寺は昭和十三年に本堂を再建し、生まれ変わりました。

当時の住職は私の祖父円晃隆満で、檀家様百三十名の弱小寺院の中、三十歳の若さで、全て一人でやい遂げたのです。勿論その時の檀家総代様の力は、絶大だったことは言うまでもないことです。

当時の資金を推測すると、現在の金額に換算し、優に五億円はかかったと思います。その内訳は土地購入費二億円・本堂建立二億円・その他本堂伽藍・客殿・庫裏・引越費用一億円等掛かったと想像できます。

昭和の戦争では、寺が戦火に巻き込まれずに済み、日本の戦後復興と高度成長とのお蔭で、東陽寺も順調に発展を遂げました。

祖父は九十歳で他界し、父天通影地がその後を引き継ぎましたが、三年でがんの為に六十四歳で他界しました。その後は、本来私がすぐにも寺を継ぐべきでありましたが、修行の関係等諸般の都合により母に十年間無理を言い、繋ぎ役として住職についてもらいました。

父と母の時代は、寺の美化活動と檀家数の倍増の発展と位置付けられます。

大 正 時 代 昭 和 時 代

祖父 円晃隆満 大和尚
享年 90 才(在住職 69 年間)
関東大震災 終戦

父 天通影地大和尚
享年 64 才(在住職3年間)
高度成長

東京利ビッ・万博

浅草時代 寺全焼 足立区移転 寺 再建 寺 美化活動

江戸時代 曹洞宗より独立

活躍した檀家様 昭 3 昭 13 昭 1 8 昭 63
村上水軍末え 客殿再興 本堂再興 墓地造成 水屋

伊勢守小濱
塩原太助 河村瑞賢

檀信徒の数の変化 百二十数名 -----> 約 百六十名 ----->

	昭和3年	昭和9年	昭和16年	昭和28年	昭和30年	昭和49年	昭和53年	昭和63年
檀家総代	木下藤二郎	木下藤二郎	長野文造	長野文造	長野文造	長野文造	吉永才助	吉永才助
	大谷芳松	長野文造	中村つね	伊藤新太郎	吉永才助	吉永才助	三枝林三郎	長野哲三
	中村かよ	中村つね	伊藤新太郎	中村安治	高田秀味	高田秀味	長野哲三	長野靖
					鴨島透	三枝林三郎	長野靖	
						山岡猪之助		

檀家総代の記録が無い為一部不明の個所あり。

特に、母の時代は、バブルの絶頂期に乗り、一年に三十、四十名の方々が東陽寺に入檀家した時期もあり活気に満ちたときです。しかし、寺の中心である私が寺と会社の掛け持ちの状況で、何かとお檀家様に迷惑をかけましたが、私の師匠本宮孝顕老師を始め豊川稲荷の僧侶・私の叔父の寺昌福寺の皆様を借り、母は苦難を乗り越えてきました。私が平成十年に会社を中途退社（サラリーマン勤続三十年に休止符）し、この年の十二月に母から寺を引継ぎ東陽寺三十一世住職になりました。

私の住職の方針は、十年計画を基本にし、母時代のお檀家様増強をベースに、更なる寺の充実と寺経営の安定充実に実行してきました。

今年で住職在任二十年ですが、初めの十年は何と云っても百年に一度の巡り会わせもあり、めでたく客殿建立と本堂改修工事との二大事業をやり遂げました。

次の平成二十二年以降の十年間は、更なる寺の充実、経営基盤充実・将来の永代供養対応・少子化対応の施策・各種マニアル整備・体制強化・特に力を入れたのは副住職への引継ぎの実行でした。

この十年計画の内、副住職への引継ぎ以外はしつかりと出来ましたが、肝心の副住職の引継ぎは、中々思うようにはいかずもう少し時間がかかります。まさに『一瓜一樹一石』

『一年の計は、穀物を植えるにある。十年の計は樹を植えるにある。百年の計は、徳を植えるにある。』如き、人を育てるに百年の計の必要を思い知らされました。

『編集後記』

平成三十年を迎え、住職になり、二十年たちます。早いものであつたという間でした。住職として私は、常に寺の新しい情報を発信しながら進んできました。

今回の「東陽寺のあれこれ」と題し、平成十一年から二十年間の色々な角度で紹介してきた東陽寺シリーズをまとめ一冊の本にしました。もう一度読み返して頂けたら幸いです。

さて、ここで編集後記として、寺の責任役員を勤める中村彰様に、この本を御一読願ひ感想を寄稿して頂きました。

「東陽寺あれこれ」は、幸朋ご住職が東陽寺を引き継がれた直後から、年二回定期的に発行している「東陽寺報」をまとめたもので、改めて拝読すると、二十年間よくここまで様々な話題を掘り起し、まとめられたものだど敬服します。東陽寺は四百年以上もの歴史があり、江戸時代から明治、大正、昭和、平成と激動の時代を経験してきたわけですから、様々な出来事があったことは想像できます。しかし、関東大震災や第二次大戦等により、多くの貴重な資料が散逸してしまつたのではないかと思います。こうした中で、過去帳や石碑などから、お寺の歴史を丹念に調べ、様々な角度から考察した寺報は、後世に伝える価値のある貴重な記録ともいえます。特に、シリーズ「東陽寺を守る仏様」や「東陽寺の過去帳に記載された有名人」などは初めて知ることも多く、大変興味深く拝読しました。寺報というのと、とかく固い内容になりがちですが、東陽寺に咲く花々やお参りの人々、近隣のお寺についての紹介など、東陽寺への関心を高めるための話題も取り上げられ、編集のご苦労の様子が窺えます。

ご住職になられての二十年間は、あつという間の出来事だったと言われますが、まさにその通りだったと思います。何ととっても、この間に客殿の再構築と本堂の改修という大事業に取り組み、様々な困難を乗り越えて見事に成し遂げられました。その多忙な中においても、「東陽寺報」を

定期的に発行し続けたのは、檀信徒の皆様が東陽寺への理解を深めていただき、結びつきをより強くしたいとの思いがあったのではないかと思います。

昨今、お寺やお墓の問題が新聞やニュース等で取り上げられることが多くなりました。少子高齢化や都会への人口集中などが進み、特に地方のお寺は、後継者問題や檀家の減少などで存続が危ぶまれるお寺も多いと報じられています。こうした中であつて、東陽寺は檀信徒の数も少しずつ増え、客殿の再構築と本堂の改修などともに、周辺の整備も進んでいます。また定例の報恩会や施食会のほか、お茶をあげる会や檀信徒研修会も行うなど、ご住職の様々な取り組みが功を奏していると思います。

これからも、「東陽寺報」を通して東陽寺の様々な情報が末永く発信されることを願ひ、併せて東陽寺の益々のご発展と檀信徒の皆様のご健康とご繁栄をお祈り申し上げます。



中村 彰

合掌